

御^ご供^く田^{でん}遺跡 6

— 第8次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第203集



2023

大野城市

序

大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦 665 年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城跡」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。

今回報告する御供田遺跡は、大野城市のほぼ中央に位置し、春日市にも広がる遺跡です。これまでの調査で、縄文時代から現代に至るまで、数多くの遺構や遺物が確認されています。今回の調査では、弥生時代や飛鳥時代の溝跡のほか、近年調査研究が進められている板付基地春日原住宅地区に関する遺構も多数確認されました。特に基地の地下遺構が本格的に調査されたのは今回が初めてであり、基地の整備過程を明らかにする上でも意義のある調査となりました。

本書が学術研究はもとより、地域の歴史や文化財の理解と認識を深める一助となり広く活用されることを願ってやみません。

最後になりますが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご指導を賜りました関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和 5 年 3 月 31 日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

例 言

1. 本書は、大野城市大字白木原317番13、407番9、635番9に所在する御供田遺跡第8次発掘調査の成果についての報告書である。
2. 調査は福岡国税局の委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は山元瞭平が担当した。
4. 遺構実測は山元、澤田康夫、齋藤明日香が行った。
5. 遺構写真は山元が撮影し、ドローンによる空中写真は(株)空中写真企画に委託した。
6. 遺物写真は(株)写測エンジニアリングに委託し、牛嶋 茂が撮影した。
7. 遺物実測は小畑貴子、古賀栄子、小嶋のり子、篠田千恵子、白井典子、津田りえ、仲村美幸、氷室優が行った。
8. 遺物拓本は小畑、篠田が行った。
9. 遺構図製図は山元、遺物図製図は小嶋が行った。
10. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修）を使用した。
11. 本書図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）による。
12. 本書の第2図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』・『不入道』を使用した。
13. 遺物の名称のうち、須惠器蓋杯については奈良文化財研究所による分類名称を用いる。
14. 出土遺物・実測図・写真は、大野城市が保管・管理している。
15. 本書の執筆は山元、深町美佳が行った。また編集は山元が行った。
16. 木製電柱の3次元計測に関しては、九州大学の田尻義了氏に多大なるご協力を賜った。
17. 木製電柱の樹種同定に関しては、九州歴史資料館の小林啓氏に多大なるご協力を頂いた。また、分析結果（第IV章）についても玉稿を賜った。
18. 発掘調査・報告書作成に関しては、下記の方々のご協力を得た。（敬称略・五十音順）
松野尾仁美（九州産業大学）、村上芳秀（サン設備設計）、
森井千賀子（春日市教育委員会）

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査経過	1
3. 調査体制	1
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
III. 調査の成果	
1. 調査の概要	9
2. 遺構と遺物	9
IV. 御供田遺跡木製鳥居型電柱の樹種同定	20
V. 総括	
1. 各時期の様相	22
2. 板付基地春日原住宅地区関連遺構について	23

挿図目次

第1図 調査地位置図 (1/5,000)	3
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6
第3図 遺構配置図 (1/200)	7～8
第4図 調査区北壁土層実測図 (1/100)	7～8
第5図 SD01土層実測図 (1/30)	9
第6図 SD01・SD02出土遺物実測図 (6は1/4、他は1/3)	10
第7図 SD02遺物出土状況実測図 (1/20)	10
第8図 SD02土層実測図 (1/30)	10
第9図 SD03土層実測図 (1/30)	11
第10図 SD04土層実測図 (1/40)	12
第11図 SD04出土遺物実測図① (1/3)	13
第12図 SD04出土遺物実測図② (1/3)	14
第13図 SD04出土遺物実測図③ (43は1/4、その他は1/3)	15
第14図 SD06・SD08土層実測図 (1/40)	16
第15図 SD08出土遺物実測図 (1/3)	17
第16図 表面採集遺物実測図 (1/3)	17

第17図	木製鳥居型電柱A 3次元計測図 (1/200)	18
第18図	木製鳥居型電柱木材顕微鏡図	21
第19図	御供田遺跡周辺遺構分布図 (1/5,000)	22
第20図	ガソリンスタンド写真 (春日市教育委員会蔵)	24
第21図	板付基地春日原住宅地施設配置図 (1/1,400)	24

表 目 次

第1表	遺物観察表①	25
第2表	遺物観察表②	26

図 版 目 次

図版 1	(1) 調査前全景 (北東から)	(2) 調査地全景 (南西から)
図版 2	(1) 調査区俯瞰① (上が東)	(2) 調査区俯瞰② (上が東)
図版 3	(1) 調査区北壁土層 (南東から)	(2) SD01全景 (南から)
	(3) SD01土層A-A' (北から)	
図版 4	(1) SD01土層B-B' (北西から)	(2) SD02全景 (南東から)
	(3) SD02土層A-A' (南東から)	
図版 5	(1) SD02土層B-B' (南東から)	(2) SD02遺物出土状況 (北から)
	(3) SD03全景 (南東から)	
図版 6	(1) SD03土層A-A' (南東から)	(2) SD03土層B-B' (南東から)
	(3) SD04全景 (南から)	
図版 7	(1) SD04土層A-A' (南から)	(2) SD04土層B-B' (南から)
	(3) SD04土層C-C' (南から)	
図版 8	(1) SD04遺物出土状況 (北東から)	(2) SD05土層 (南から)
	(3) SD06土層A-A' (南から)	
図版 9	(1) SD08土層A-A' (北東から)	(2) 貯油タンク (南西から)
	(3) コンクリート構造物 (南東から)	
図版10	(1) 木製鳥居型電柱 (南西から)	(2) 木製鳥居型電柱A (北から)
	(3) 木製鳥居型電柱A (南から)	
図版11	出土遺物①	
図版12	出土遺物②	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

御供田遺跡は、JR鹿児島本線大野城駅周辺に位置し、大野城市・春日市に跨って所在している。本市においては、白木原1丁目・大字白木原・大字上大利に遺跡の範囲が広がる。本市では10次にわたる調査を実施し、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。

今回報告するのは、本市が御供田遺跡第11次調査として実施した場所であり、大字白木原317番13、407番9、635番9にあたる。平成21（2009）年、福岡国税局から当該地における埋蔵文化財の有無について照会があった。埋蔵文化財の存在が予想されることから、平成21年1～2月に試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が確認された。その後、開発事業は実施されていなかったが、令和3（2021）年1月に福岡国税局から、庁舎新設の事業計画が提出された。計画では地表下約5mを掘削したうえで、地盤改良を行う予定で、遺構の保護が困難であることから、発掘調査が必要と判断された。

事業者からの計画予定図面を添えて93条に基づき届出を福岡県教育庁あてに提出し、令和3年2月15日付で発掘調査の指示が出された。また、事業者から令和3年1月28日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が提出された。これを受け、令和3年4月7日から同年7月27日にかけて発掘調査を実施した。事業地約3,500㎡のうち、調査対象面積は約1,500㎡である。整理作業は、令和4年度に実施した。なお、発掘調査及び整理作業に関する費用は、事業者が全額負担した。多大なるご理解とご協力を頂いた福岡国税局には記して感謝の意を申し上げたい。

2. 調査経過

発掘調査は、令和3年4月7日から開始した。重機による表土剥ぎが終了した部分から順次調査に着手することとし、4月19日から作業員による遺構の検出と掘削を開始した。調査面積に対する遺構の密度は高くないものの、調査区西側を縦断する溝（SD04）の掘削に時間を要した。6月30日には概ね遺構の掘削が完了した。7月3日に発掘調査成果の現地説明会を行い、115名の参加者を得た。7月15日にドローンによる空中写真撮影を実施し、7月20日まで図面等の記録作成を行った。7月27日に調査区の埋め戻し及び器材の撤収を完了した。なお、調査完了後の令和4（2022）年11月15日、事業地内に位置する板付基地関連遺構の木製電柱解体を受け、現地にて碍子等の回収を行った。

3. 調査体制

令和3年度から令和4年度における発掘調査及び整全体制は以下のとおりである。

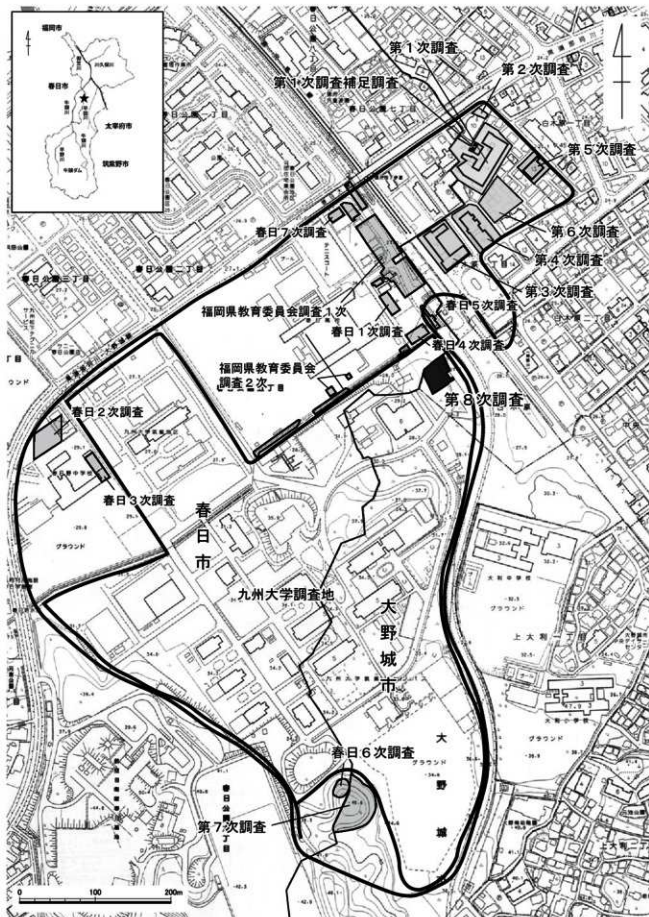
令和3年度（発掘調査）

教育長	吉富 修（～6月）	伊藤 啓二（6月～）
教育部長	日野 和弘	
ふるさと文化財課長	石木 秀啓	

啓発整備担当係長	林 潤也						
主査	徳本 洋一						
主任主事	秋穂 敏明						
主事	鮫島 由佳						
会計年度任用職員（啓発）	山村 智子	深町 美佳					
会計年度任用職員（庶務）	三好 りさ	光原 乃里子（～9月）	荒牧 美佐子（10月）				
	野上 知則（11月～）						
発掘調査担当係長	上田 龍児						
主任技師	山元 瞭平						
技師	齋藤 明日香						
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫	石川 健（12月～）					
会計年度任用職員（発掘作業）	船越 桃子	深野 人美	大崗 英美	仲前 富美子			
	井口 るみ子	篠崎 繁美	東島 真弓	安里 由利子			
	仁田 幸男	山下 宏昭	森 一雄	佐野 敏彦			
	佐々田 薫	瀧口 松夫	大津 幸男	手嶋 敏則			
	田中 悦子	小林 敏子	坂本 泰子	浅田 ふえ			
	川崎 敏次郎	佐藤 寛行	吉田 俊秀	田中 良一			
会計年度任用職員（事務補助）	山上 敬子	井之口 彩子					

令和4年度（整理事業）

市長	井本 宗司						
地域創造部長	増山 竜彦						
大野城市心のふるさと館							
館長	赤司 善彦						
文化財担当 課長	石木 秀啓						
係長	林 潤也	上田 龍児					
主査	徳本 洋一						
主任主事	秋穂 敏明						
主任技師	山元 瞭平						
技師	齋藤 明日香						
会計年度任用職員	澤田 康夫	石川 健	山村 智子	深町 美佳			
	照屋 真澄（8月～）	小川 久典（～6月）		清水 康彰			
	大塚 健三（7月～）						
会計年度任用職員（整理事業）	白井 典子	仲村 美幸	小嶋 のり子	松本 友里江			
	津田 りえ	水室 優	古賀 栄子	篠田 千恵子			
	小畑 貴子						
会計年度任用職員（事務補助）	山上 敬子	井之口 彩子					



第1図 調査地位置図 (1/5,000)

Ⅱ. 位置と環境

1. 地理的環境

大野城市は福岡平野の南部に位置し、南北に細長く中央部がくびれた形を呈する。市域の南側には、牛頸山とそれから派生する低丘陵が広がる。牛頸山は、背振山系の一角をなし、地盤は早良型花崗岩に属し、表層は風化が激しい真砂土となっている。牛頸山北麓から北側低丘陵にかけては、御笠川の支流である牛頸川と、牛頸川の支流である平野川の開析作用によって無数の谷がつかられ、複雑な地形を形成している。御供田遺跡は市域の中央部、JR鹿児島本線大野城駅周辺に位置し、大野城市・春日市に跨って所在している。遺跡全体の範囲は、大野城市白木原1丁目や上大利1丁目から春日市春日公園5丁目に及んでおり、九州大学筑紫キャンパスや県立春日高校が立地する丘陵部・段丘部と、大野城駅一帯に広がる平野部で構成されている。今回報告する調査地は丘陵部の先端に広がる平地部にあたる。大野城市側では、これまでに8次にわたる発掘調査が行われており、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。

2. 歴史的環境

御供田遺跡の所在する大野城市北部では、旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が確認されている。ここでは、旧石器時代から現代までの周辺遺跡を概観したい。

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は少ないが、釜蓋原遺跡、雉子ヶ尾遺跡、松葉園遺跡、葉師の森遺跡などの丘陵上の遺跡でナイフ形石器や細石刃といった遺物が確認されている。

縄文時代 市域では草創期の遺構・遺物は確認されていない。早期になると、釜蓋原遺跡、善一田遺跡といった丘陵上の遺跡において押型文土器が出土している。前期から中期にかけての遺跡は見つかっておらず、後・晩期の遺跡として、市南部の塚原遺跡や日ノ浦遺跡で竪穴住居が確認されている。

弥生時代 前期の遺跡は丘陵部に多く、御陵前ノ椽遺跡、中・寺尾遺跡、塚口遺跡で木棺墓・甕棺墓といった墓地在営されている。集落は、仲島遺跡やヒケシマ遺跡が平野部に展開する。中期には、仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡が前期から継続し、丘陵部には中・寺尾遺跡や森園遺跡が展開する。墳墓については、前期から継続する中・寺尾遺跡のほか、中期後半を主体とする森園遺跡において、甕棺墓群が営まれている。後期になると、仲島遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡などで集落が認められ、仲島遺跡では貨布や銅鏡、青銅器鋳型などが出土しており拠点集落と考えられる。

古墳時代 市域北部の前期古墳には御陵古墳群があり、割竹形木棺や箱式石棺を主体部とした円墳が確認されている。また、御陵古墳出土と伝わる三角縁神獣鏡があり、有力な首長層の存在が想定される。集落は仲島遺跡や石勺遺跡、村下遺跡が弥生時代後期から継続し、瑞穂遺跡や原ノ畑遺跡では新たに集落が展開する。中期には四王寺山麓において、5世紀前半に位置付けられる笹原古墳があり、5世紀後半には成屋形古墳が築造され、御笠川流域の盟主墳と考え

られる。また、古野遺跡では5世紀後半から古式群集墳が形成される。当該期の集落は、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、原田遺跡などがあり、なかでも石勺遺跡は初期のカマドや朝鮮半島系の軟質土器が確認されており、拠点集落と考えられている。後期になると、乙金山・四王寺山の麓に大規模な群集墳が展開する。善一田古墳群や大城山古墳群が代表的で、6世紀後半から7世紀代にかけて造墓・追葬が行われている。古墳群に対応する集落として、薬師の森遺跡があり、鉄器や須臾器の生産に関わる集落とされる。周辺には乙金窯跡や雉子ヶ尾窯跡が操業するものの、次代には継続せず散発的な生産に留まる。

飛鳥時代 7世紀を代表する古墳に、本市と福岡市の境に位置する今里不動古墳がある。7世紀前半大型円墳（30m）で、御笠川右岸地域の盟主墳である。乙金山・四王寺山麓における群集墳は7世紀前半をピークに、次第に築造数が減少する。集落は、薬師の森遺跡や仲島遺跡などに展開する。7世紀後半をむかえると、663年の白村江の戦いの敗戦を契機に、水城・大野城が築造される。

奈良～平安時代 奈良時代になると律令国家が整い、大宰府を中心とした西海道一帯の支配体制が成立する。水城を抜けて博多方面に通じる東西2本の官道が整備され、官道沿いには仲島遺跡や雑餉隈遺跡、井相田C遺跡など大規模な集落が展開する。牛頸窯跡群では8世紀代に生産が拡大し、小型器種を中心に大量生産を行うが、次第に衰退し、9世紀中頃には操業を終了する。

平安時代前半には遺跡数が減少し、仲島遺跡や井相田C遺跡は9世紀代に消滅する。中・寺尾遺跡や塚口遺跡では土壙墓が確認されている。平安時代後半には大宰府政庁・鴻臚館が廃絶し、中世都市博多が成立する。集落は塚口遺跡、御笠の森遺跡、宝松遺跡があり、森園遺跡、松葉園遺跡などでは貿易陶磁器を副葬する土壙墓が見つかった。

鎌倉～戦国時代 前代に比べて遺跡数が増加する。薬師の森遺跡では区画溝で囲まれた集落や水田跡が確認されている。また、貿易陶磁器を副葬する土壙墓も多数営まれているほか、瓦器生産を示す遺構や窯道具と目される棒状土製品も見つかった。御笠の森遺跡では16～17世紀の方形区画溝が多数展開し、拠点集落と考えられる。

近世～近現代 江戸時代の遺跡には御笠の森遺跡、雑餉隈遺跡などがある。御笠の森遺跡は『筑前国続風土記拾遺』に記載された山田村の集落移転とその動態が一致し、注目される。山田村移転後に形成された集落には雑餉隈遺跡がある。日田街道沿いに位置し、間の宿として栄えたことが記録されているほか、新川と呼ばれる運河跡も見つかった。薬師の森遺跡や原口遺跡、古野遺跡には近世墓が確認されている。近現代の遺構は、王城山遺跡や古野遺跡などで太平洋戦争時の防空壕が見つかっており、証言や出土遺物から軍事的な疎開工場と想定される。また、御供田遺跡では戦後に米軍が整備した板付基地春日原住宅地区に関連する遺構や遺物が確認されている。



【春日市】

- | | | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-----------|-----------|----------|------------|
| 1. 須玖遺跡群 | 2. 春日公園内遺跡 | 3. 小倉水城跡 | 4. 大土居水城跡 | 5. 惣利宮跡群 | 6. 惣利遺跡 | 7. 惣利北遺跡 |
| 8. 惣利東遺跡 | 9. 惣利西遺跡 | 10. 大牟田京跡 | 11. 向谷北遺跡 | 12. 平田北遺跡 | 13. 円入遺跡 | 14. 春日平田遺跡 |
| 15. 春日平田西遺跡 | 16. 春日平田東遺跡 | 17. 通ノ原宮跡群 | | | | |

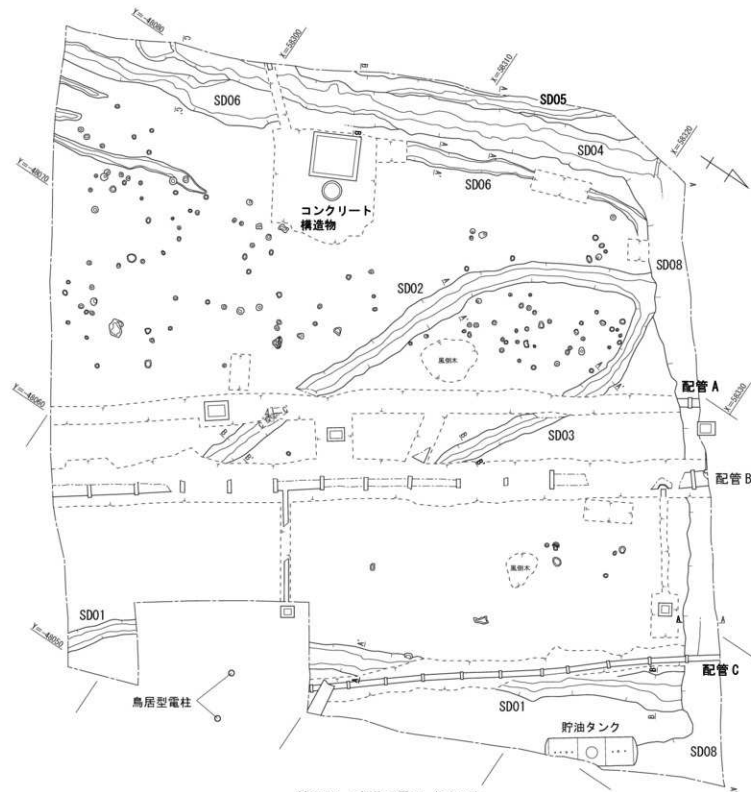
【大野城市】

- | | | | | |
|----------------|-------------|-----------|-----------|----------------------------|
| 18. 原ノ畑遺跡 | 19. 大湫端遺跡 | 20. ハザコ遺跡 | 21. 後原遺跡 | 22. 御供田遺跡 (九州大学筑紫キャンパス遺跡群) |
| 23. 池田・池ノ上遺跡 | 24. 梅頭遺跡群 | 25. 本堂遺跡 | 26. 上原遺跡 | 28 (33). 谷川遺跡 |
| 30. 向川路遺跡 | 31. 末次遺跡 | 32. 天神田遺跡 | 34. 唐土遺跡 | 29. 永福遺跡 |
| 38. 小水城周辺遺跡 | 39. 上大利小水城跡 | 40. 谷置遺跡群 | 41. 野添遺跡 | 35. 父子輪遺跡 |
| 45. 横峰I遺跡 | 46. 横峰II遺跡 | 47. 屏風田遺跡 | 48. 日ノ浦遺跡 | 36. 出口遺跡 |
| 52. 月ノ浦遺跡 | 53. 正業寺跡 | 54. 馴ノ元古墳 | 55. 馴ノ元遺跡 | 37. 矢倉遺跡 |
| 59. 城ノ山宮跡・不動城跡 | 60. 中道古墳 | 61. 中道遺跡 | 62. 中道古墳群 | 38. 花無尾遺跡 |
| 66. 石取京跡群 | 67. 大谷宮跡群 | 68. 原浦宮跡群 | 69. 原宮跡 | 40. 畑ヶ坂遺跡 |
| | | | | 41. 下ノ原遺跡 |
| | | | | 57. 大行寺遺跡 |
| | | | | 58. 平野遺跡 |
| | | | | 64. 後田宮跡群 |
| | | | | 65. 小田浦宮跡群 |
| | | | | 71. ハセムシ宮跡群 |

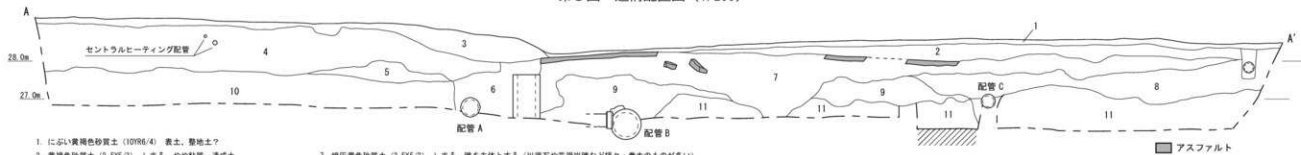
【大宰府市】

- | | | | | | |
|----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 72. 島本遺跡 | 73. 神ノ前遺跡 | 74. 鎌振遺跡 | 75. 宮ノ木遺跡 | 76. カヤノ遺跡 | 77. 京ノ尾遺跡 |
|----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 遺構配置図 (1/200)



1. にがい質褐色砂質土 (10196/4) 表土、墾地土?
2. 黄褐色砂質土 (2.515/3) しまる、やや粘質、遠成土
3. 黄褐色砂質土 (10193/1) 表土、ややしまる、やや粘質、ゴミ混じり
4. 黄褐色砂質土 (10196/6) しまる、やや粘質、遠成土
5. 褐色砂質土 (10196/3) ややしまる、やや粘質、遠成土か
6. 黄褐色砂質土 (2.515/3) ややしまる、やや粘質、配管能力埋土

7. 雑灰黄色砂質土 (2.515/2) しまる、雑を主体とする (川源石や花崗岩屑など種々・季々のものが多い)
8. にがい質褐色砂質土 (10195/4) しまる、やや粘質、遠成土
9. 黄褐色シルト (2.515/3) ややしまる、やや粘質
10. オリーブ褐色砂質土 (2.514/3) しまる、やや粘質、SD08埋土か
11. SD08埋土・表分層

第4図 調査区北壁土層実測図 (1/100)

Ⅲ. 調査の成果

1. 調査の概要

調査対象地は標高28～29m前後で、西側は80cmほど高く造成されている。調査地内には、板付基地春日原住宅地区で使用されていた木製の鳥居型電柱が南北に2基並んでいる以外、構造物はない。調査前は更地であり、特に利用されていなかった。遺構面は、表土(15cm)、真砂土(100cm)、耕作土(40cm)を除去した後確認した。調査区の東西で遺構面の標高は異なり、地形からみても西から東への傾斜が想定されるが、それに加えて東半部分は後世に削平を受けているものとみられる。遺構面は砂質土を基本とし、よくしまる。

調査の結果、溝8条のほかピットを複数確認した。遺物は主に溝から出土し、弥生土器・土師器・須恵器・石製品・ガラス製品等がある。

2. 遺構と遺物

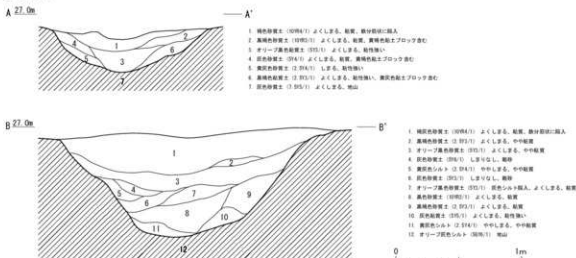
(1) 溝

SD01 (第3・5図、図版3・4)

調査区東端に位置し、南東から北西に向かって直線的に延びる。検出した長さは32.6mで、北端はSD08に切れ、南端は調査区外へ延びるものと推測される。また、板付基地関連遺構が一部重複している。南端で幅1.0m、北端で幅2.1mを測り、北側へ向かって幅広となる。底面の標高は南端で26.5m、北端で26.2mと、北側へ向かってわずかに傾斜している。土層は粘質土をはさみつつも、砂質土が主体をなし、流水環境が想定される。遺物は弥生土器が出土したが、いずれも小片かつ少量であった。

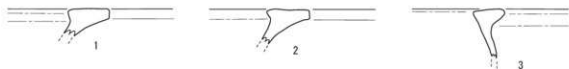
出土遺物 (第6図)

弥生土器 (1～3) いずれも甕の口縁部片である。1・2は口縁部が内側にやや突出し、口唇部は面を有する。3は口縁部に向かって内湾気味に立ち上がる。口縁部は肥厚し、断面三角形をなす。

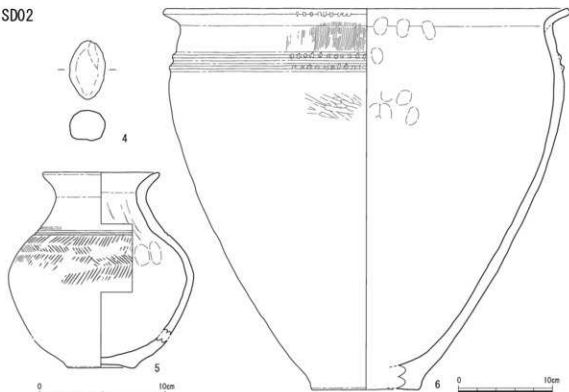


第5図 SD01土層実測図 (1/30)

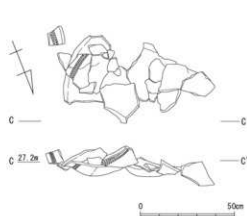
SD01



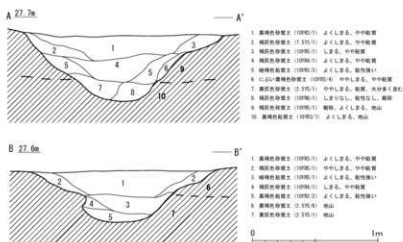
SD02



第6図 SD01・SD02出土遺物実測図(6は1/4、他は1/3)



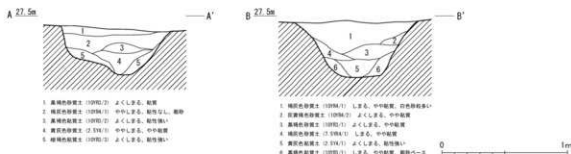
第7図 SD02遺物出土状況実測図(1/20)



第8図 SD02土層実測図(1/30)

SD02 (第3・7・8図、図版4・5)

調査区中央に位置し、南東から北西方向に延びる。北端部で西に向かって緩やかに湾曲し、SD03と合流する。検出した長さは約13.5mで、北端はSD03と一体となり、その延長部分はSD08に切られる。また南端は板付基地関連遺構に切られており、それよりも南側では検出さ



第9図 SD03土層実測図 (1/30)

れていない。幅0.8～1.0mとほぼ一定で、断面は逆台形をなす。底面の標高は、南端・北端いずれも標高27.0m前後と、ほとんど比高差がない。埋土は一部粘質土をはさみつつ、砂質土を主体とする。出土遺物は検出時に須恵器が出土したほか、南側で弥生土器がまとまって出土した。

出土遺物 (第6図、図版11)

弥生土器 (5・6) 5は小型壺。底部はわずかに上げ底で、胴部は球形をなす。口縁部は緩やかに外反する。肩部には3条の沈線が廻り、その下位には無軸羽状文が施される。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。6は甕。底部は平底で、胴部上位で最大径となる。口縁部は屈曲して外反する。口唇部は面をなし、刻目が施される。胴部最大径のやや上位に2条の突帯が廻り、いずれも刻目が施される。内外面とも器壁の摩滅が著しいが、外面は口縁下位にハゲ、一部にミガキ調整が認められる。内面はナデ調整とみられ、部分的に指頭痕が残る。

土製品 (4) 土製の投弾で、紡錘形を呈する。

SD03 (第3・9図、図版5・6)

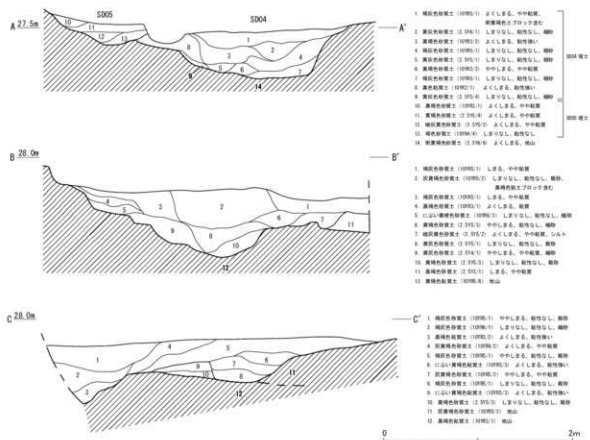
調査区中央に位置し、SD02と平行しつつ南東から北西方向に延びる。北端部で西に向かって緩やかに湾曲し、SD02と合流している。検出した長さは約26mで、北端はSD02に接続し、その延長部分はSD08に切られている。また南端は板付基壇関連遺構に切れ、それより南側では検出されていない。幅1.0～1.5mを測り、断面は逆台形をなす。底面の標高は北端で27.0m、南端で26.9mとほとんど比高差はない。埋土は砂質土を主体とする。出土遺物は検出時に須恵器が出土したが、図示できなかった。

SD04 (第3・10図、図版6～8)

調査区西端に位置し、南から北に向かって直線的に延びる。検出した長さは約28.5mで、北端部分はSD08に切られる。また南端は調査区外へと延びている。幅1.5～2.0m、深さ50～70cmを測る。南端・北端いずれも標高27.0m前後と、ほとんど比高差がない。埋土は砂質土を主体とする。底面からは絶えず湧水が認められた。土師器、須恵器などの土器類がまとまって出土した。遺物は層位ごとに報告する。

遺構検出時 (第11図)

須恵器 (7～13) 7は杯H蓋で、口径14.2cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされ、丸みを帯びる。8は杯B蓋。扁平な形態をなし、口縁端部は短く垂下する。天井部は回転ヘラケズリされる。9は杯B身。底部端に台形状の高台がつく。10は高杯。小型のもので、脚端部は嘴状



第10図 SD04土層実測図 (1/40)

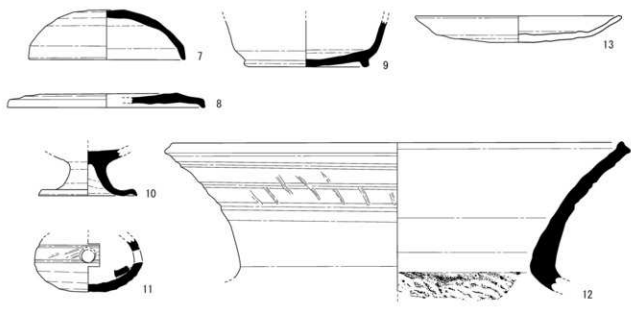
をなす。11は甕。胴部中位に穿孔があり、穿孔時の粘土は内部で附着している。外面には2条の沈線が廻り、その間を刺突文で充填する。底部は回転ヘラケズリされる。12は須恵器甕。頸部は外反気味にのび、口縁端部は上方へつまみ出す。外面には3条の沈線と斜線文が廻る。胴部内面には同心円文当て具痕が残る。

土師器 (13) 13は皿。回転台成形で、底部はヘラ切り未調整である。

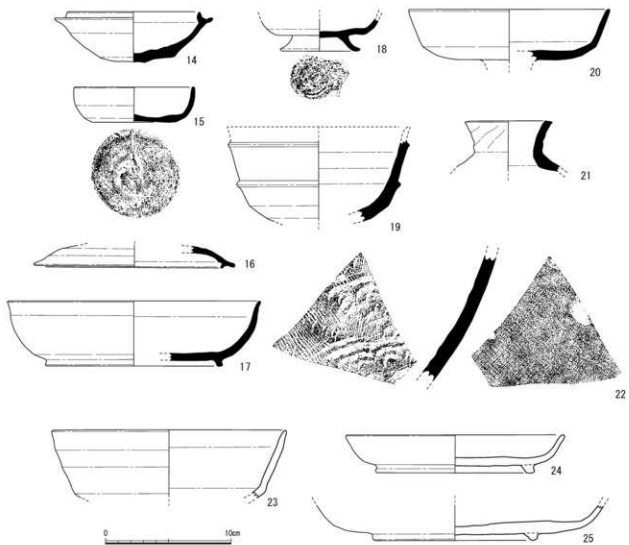
上層出土遺物 (図11・12、図版11)

須恵器 (14~23) 14は杯H身で、口径10.5cm、最大径12.6cmを測る。立ち上がりは短く、端部はとがる。底部はヘラ切り未調整である。15は杯G身で、口径10cmを測る。体部は内湾気味にのび、端部は丸くおさめる。底部外面はヘラ切り未調整で、ヘラ記号を刻む。16は杯B蓋で、内面に短いかえりがつく。17は杯B身。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁付近で外反する。断面台形の高台がつく。18は小型の椀か。ハの字に開く長い脚がつく。底部外面にはヘラ記号を刻む。19は椀で、外面に2条の稜線が廻る。底部外面は回転ヘラケズリされる。20は高杯で脚部を欠く。底部は回転ヘラケズリされる。脚部との接合部分には接合強化を意図した円弧状の刻みを施す。21は壺で、口唇部は面を有する。口縁部には絞り痕跡が明瞭に残る。22は甕の胴部片。外面は擬格子タタキ、内面には同心円文当て具痕を切る形で、ハケ状工具による調整が認められる。

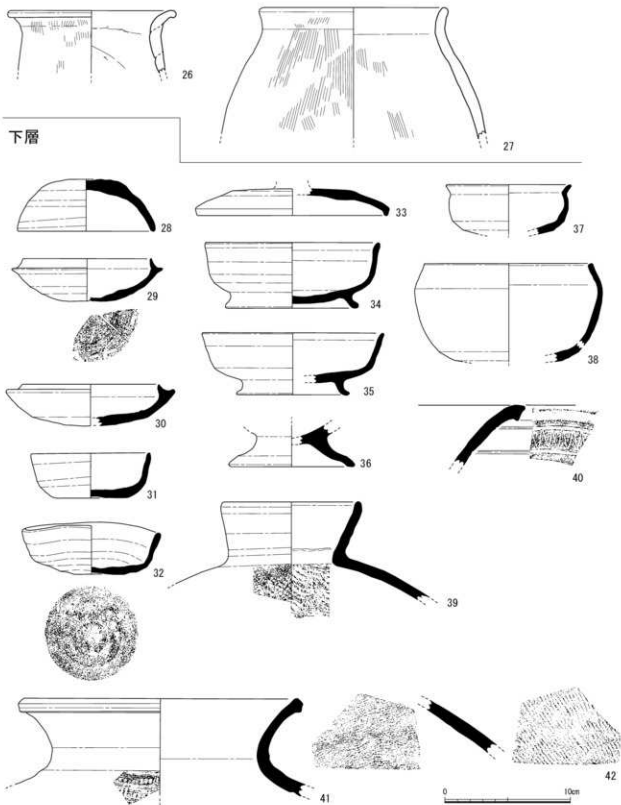
検出



上層



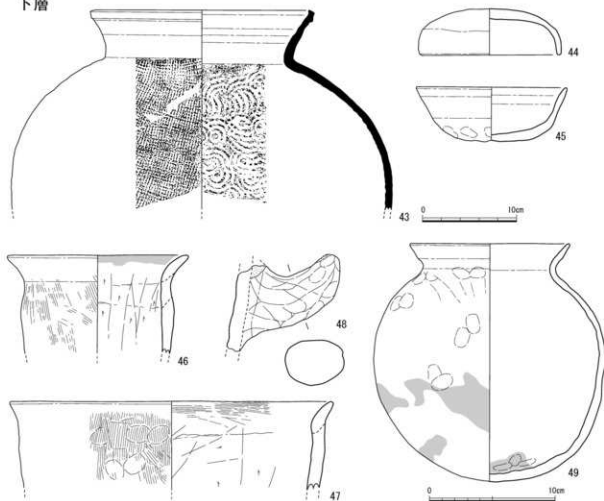
第11図 SD04出土遺物実測図① (1/3)



第12図 SD04出土遺物実測図② (1/3)

土師器 (23～25) 23は杯。体部は直線的に開く。回転台成形。24・25は、高台のつく皿。いずれも回転台成形で、底部と体部の境は丸みを帯びる。底部外面は回転ヘラケズリされ、断面台形の高台がつく。26・27は甕。26は口縁部が短く外反し、端部はやや肥厚する。外面ハケ、

下層



第13図 SD04出土遺物実測図③ (43は1/4、その他は1/3)

内面ケズリで、内面には粘土つなぎ目が明瞭に残る。27は口縁部がわずかに外反し、胴部は中央に向かって膨らむ。外面ハケ、内面はハケ後ナデにより仕上げる。

下層出土遺物 (第12・13図、図版11・12)

須恵器 (28～43) 28は杯H蓋で、口径11cmを測る。器高が高く、天井部は丸みを帯びる。回転ヘラ切り後ナデ。29・30は杯H身。29は口径10.2cm、最大径12cmを測る。立ち上がりは短く内傾する。底部は回転ヘラケズリされ、ヘラ記号が刻まれる。30は口径10.9cm、最大径13.4cmを測る。底部は回転ヘラケズリされる。31・32は杯G身。32は口径9.5cmを測る。底部は回転ヘラ切り後ナデ。32は大きく焼き歪む。底部は回転ヘラ切り後ナデで、ヘラ記号が刻まれる。33は杯B蓋。天井部は回転ヘラケズリされ、つまみの痕跡が残る。34・35は杯B身。いずれも底部は回転ヘラケズリされ、外へと踏ん張る高台がつく。36は壺の脚か。裾部で緩やかに内湾し、端部には面を有する。37・38は鉢。37は小型のもので、口縁部がくの字形に屈曲する。38は深みのある器形で、口縁付近で内湾する。端部には面を有する。39は横瓶か。外面は格子タタキ、内面は同心円文当て具痕である。40～43は須恵器甕。40は外面に2条の沈線が廻り、その間を波状文で充填する。41は頸部が外反し、端部は肥厚する。胴部外面は平行タタキ後カキメ、内面には同心円文当て具痕が残る。42は胴部片で外面は平行タタキ、

内面は同心円文当て具痕を一部ナデ消している。43は頸部が直線的に開き、端部は肥厚する。外面は擬格子タタキ、内面は同心円文当て具が残る。

土師器 (44～49) 44は須恵器模倣の杯蓋で、口径11.2cmを測る。天井部は丸みを帯び、端部は丸くおさめる。天井部外面は手持ちヘラケズリ後ナデ、その他はナデにより仕上げる。45は杯で、口径12cmを測る。体部はやや外反し、端部は丸くおさめる。手持ち成形で、底部を押し出した際の指頭痕が明瞭に残る。46・49は甕。46は胴部が張らず、口縁部は緩やかに外反する。口縁部は内外面ナデ、胴部は外面ハケ、内面は縦方向のケズリが施される。口縁部内面に煤が付着する。49は球胴をなすもので、ほぼ完形。口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整で、外面には煤が付着する。47・48は甕。47は甕の口縁部とみられ、端部はわずかに外反する。口縁部は外面ナデ、内面ハケ。胴部は外面ハケ、内面横方向のケズリである。48は把手部分で、内外面ともナデ調整である。

SD05 (第3・10図)

調査区西端に位置し、南から北にほぼ直線的に延びる。検出した長さは約14mで、北端部分は調査区外へと延び、南端部はSD04に接続している。幅0.8～1.0m、深さ30cm前後を測る。底面の標高は南北両端ともに27.4mと一定である。埋土は砂質土である。土層堆積状況から、SD04埋没後に掘削されたことが分かる。出土遺物は土師器、須恵器などがあるが、いずれも小片で図示し得なかった。

SD06 (第14図、図版8)

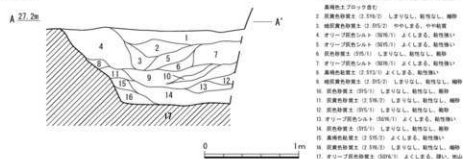
調査区西側に位置し、南北方向に直線的に延びる。検出した長さは約32mで、北端部分は東に向かって湾曲し、最終的にはSD08に切られる。また南端は春日原住宅地地区関連遺構により切られているが、さらにその南側でも浅い溝状遺構が延びることから、おそらくSD06と一連のものと考えられる。この溝は調査区外へとさらに延びている。幅0.5～2.0m、深さ15～30cmを測り、底面の標高は南北両端ともに27.3m前後でほとんど変わらない。埋土は砂質土を主体とする。なお、南側の土層図(第10図C-C')を確認すると、すでに存在した落ち込み(溝

か)の埋没後に掘り込まれていることが分かる。出土遺物は土師器、須恵器などがあるが、いずれも小片で図示できなかった。

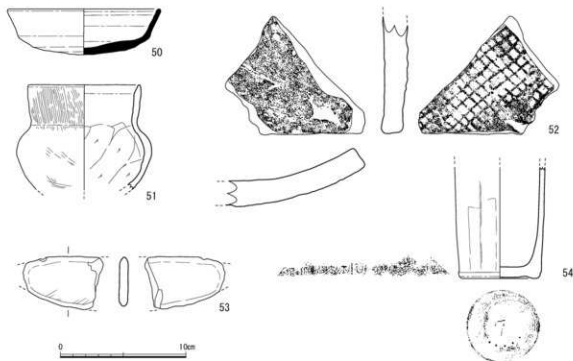
SD06



SD08



第14図 SD06・SD08土層実測図 (1/40)



第15図 SD08出土遺物実測図 (1/3)

SD08 (第15図、図版9)

調査区北端に位置し、南西から北東方向に延びる。検出した長さは約32mで、東西両端ともに調査区外へと延びている。また、東端部は南側に向かって直角に曲がり、調査区外へ続くものとみられる。北側の立ち上がりは調査区外に位置するため、本来の幅は明らかでない。検出部分の幅は1.0～1.8mを測る。先行して掘削したトレンチから、近現代の遺物が出土したことから、完掘はせず平面検出に留めた。トレンチ部分では深さ80cmを測り、埋土は砂質土を主体とする。底面からは湧水が認められた。遺物は土師器、須恵器、瓦、ガラス瓶などが出土した。

出土遺物 (第6図)

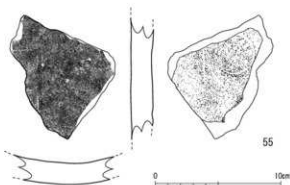
須恵器 (50) 50は杯G身で、口径12.2cmを測る。体部は直線的にのび、口縁部内面に浅い沈線が廻る。底部は回転ヘラケズリされる。

土師器 (51) 51は小型壺。胴部は球形をなし、口縁部は垂直にのびる。外面は口縁部・胴部ともにハケ、内面は口縁部がナデ、胴部は縦方向のケズリである。

瓦 (52) 52は平瓦。凸面は格子目タタキ、凹面はナデ調整である。

石製品 (53) 頁岩製の石包丁で、中央で折損する。穿孔は認められない。

ガラス製品 (54) 54はガラス瓶で、銘から



第16図 表面採集遺物実測図 (1/3)

サイダー瓶とみられる。暗緑色で、ガラス内には気泡が入る。側面には「登録商標 日本麦酒 鎌泉」、底部には「7」とエンボス加工される。「登録」と「商標」の間には三ツ矢のマークが描かれる。

(2) 表面採集遺物 (第16図)

瓦 (55) いぶし瓦の小片で、凸面には円形のスタンプが押し、中央に「統制」、その周辺には「第40」などの文字が見えるが、摩滅のため判読は難しい。

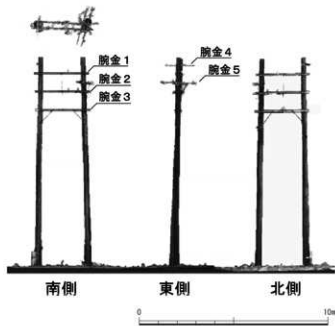
(3) 板付基地春日原住宅地区関連遺構

ここでは、1946年以降に米軍により整備された板付基地春日原住宅地区に関連する遺構について報告する。なお、各遺構の位置付けについては第V章で述べる。

鳥居型木製電柱 (第3・17図、図版10)

調査地の東側に2基存在し、調査地内で唯一地上に存在する板付基地関連の構造物である。両者は約40m離れて設置されており、配電線はすでに撤去されている。ここでは北側に位置するものを電柱A、南側に位置するものを電柱Bと呼称する。今回の開発事業では電柱Aのみ解体されることから、3次元計測ならびに使用木材の樹種同定を実施した。以下では、電柱Aについて報告する。なお、電柱使用木材の樹種同定については第IV章を参照されたい。

電柱Aは、2本の木材を使用したいわゆる鳥居型の電柱である。規模や上部構造から、配電線の役割を担うものとみられる。柱は東西に軸をとり設置されており、現地表からの高さは11mで、地表下に1.8m埋設していた。いずれも上方に向かってわずかに細くなる。各柱間の距離(幅)は、下端部で2.3m、上端部で2.0mと、上方に向かって距離(幅)を減じていることが分かる。これは第17図からも読みとることができ、柱は垂直ではなくわずかに傾きながら伸びている。柱材はクレオソートによる防腐処理がなされており、表面が黒ずんでいる。これを示すように「加圧式 クレオソート



第17図 木製鳥居型電柱A 3次元計測図 (1/200)

福岡木材防腐株式会社 今宿工場 (88)」と書かれた円形の金属ラベルが打ち付けられていた。上方には、2本の腕金で柱を挟み込むタイプの抱腕金が計3組、両柱を繋ぐように設置される(腕金1～3)。碍子は腕金1・2に設置されており、高圧ピン碍子・高圧引留碍子が認められる(図版12 碍子A・B)。いずれも磁器製で、「川惣1957」あるいは「K」のロゴマークを印字し、高圧を示す赤いラインが入る。これらの腕金に対して直行する腕金もあり、西側の柱に単一腕金が1本(腕金4)、東側の柱に抱腕金が1組(腕金5)、設置されている。碍子は腕金5

にのみ設置されており、上述したものと同一高圧ピン碍子・高圧引留碍子が認められる。その他、東側にのみ香蘭社製の低圧引留碍子1点が設置されていた(図版12 碍子C)。

貯油タンク(第3図、図版9)

調査区東端で検出した鉄製の貯油タンクである。円筒形を呈し、両端は外側へと膨らみレンズ状をなす。長さ4.9m、幅1.5mを測る。下半部は埋没しているため正確には分からないが、断面は正円形をなすものとみられる。表面には部分的に赤い塗料の痕跡が残るため、本来は全面が赤く塗装されていたようである。文字等は確認できなかった。上面中央には、煙突状の突出部があり、タンク内部と通じている。また、この突出部の南側には4つ、北側には3つの径10cmの小穴があげられており、送油口・返油口などとみられる。タンクを覆う構造物等は確認できなかった。タンクの内容量は、現在一般的に使用されている同規格のものに照らせば、約8,000ℓと想定される。

コンクリート構造物(第3図、図版9)

調査区西側で確認された方形と円形の鉄筋コンクリート造の構造物である。方形構造物の東側に接するように円形構造物が設置されている。方形構造物は、一辺約2.4mの正方形をなし厚さ20cmを測る。内部は空洞とみられるが、土が流入しており詳細は不明である。上端は不正形で鉄筋がむき出しのため、解体時に上部が破壊されたものとみられる。円形構造物は、直径約1.0mの正円形をなし、厚さ20cmを測る。内部は空洞とみられるが、土が流入している。こちらも上端は不正形であることから、本来は上方へと続いていたものとみられる。これらの構造物の周囲には、一辺5m程度の掘り方が廻り、設置に伴う掘削と考えられる。

配管群(第3・4図)

調査区中央から東側にかけて、南北方向に伸びるコンクリート製の配管を3本確認した。西から順に配管A・B・Cと呼称する。いずれも調査区外へとさらに延びるものと考えられる。配管Aは口径50cm、配管Bは口径80cm、配管Cは口径40cmをそれぞれ測る。規模は異なるものの、同規格の配管をリング状のジョイント(コンクリート製)で連結し、結合部分をモルタルで目張りするという構造は同様である。また、全体を検出した配管Cはジョイント下部に枕木を配置しており、安定を図ると同時に傾斜を調整したとみられる。また、配管Bは、東西両側に設置されたコンクリート製の溜槽から延びる配管で連結している。南北端を検出している配管B・Cについて、その上面の標高を計測したところ、南北でその標高はほとんど変わらなかった。そのためどちらの方角への排水を意図したか、傾斜の面からは明らかでない。

住宅地区整備にかかる造成(第4図、図版3)

調査区北側の土層(第4図)を確認すると、SD08とした近代の溝を覆うように造成が行われたことが分かる。堆積状況は、概ね配管A付近を境に様相が異なる。西側は真砂土を厚く敷きならし、東側に比べて1m程度高く造成されている。地中には小口径の配管が認められた。一方東側は、大振りな礫を主体とする土で整地した後、アスファルトの路面を整備している。なお、上述した配管群は造成土を切り込んでいないことから、配管を施工した後に造成を行ったものと考えられる。

IV. 御供田遺跡木製鳥居型電柱の樹種同定

九州歴史資料館 小林啓

1. はじめに

木材は光学顕微鏡やデジタルマイクロスコープ等の各種顕微鏡で拡大観察すると、細胞の種類や配列が樹種により異なる特徴をもっていることが分かる。この組織構造の特徴や違いをもとに木材の樹種を同定することができる。本稿では御供田遺跡の木製鳥居型電柱（以下、電柱）の樹種同定の結果について報告する。

2. 資料と方法

樹種同定の対象は、御供田遺跡の電柱2点である（第18図）。発掘調査の際に各電柱から樹種同定用のサンプルを採取し、それらを各種顕微鏡で観察して樹種を同定した。サンプルの観察は、実体顕微鏡（Leica S9D）及びデジタルマイクロスコープ（HIROX HRX-01）、顕微鏡写真はデジタルマイクロスコープ（HIROX HRX-01）を使用した。

3. 結果

観察の結果、電柱A・1・A-2共にスギと同定した。観察により得た同定根拠は下記に示すとおりである。スギは北海道南部から本州、四国、九州、屋久島までの各地に生育し、日本列島の広範囲に植生分布をもつ。一属一種の日本特産の常緑高木、材は通直で耐性、弾性に比較的富み加工性に優れているため、現在でも柱木等の建築材として利用されている。

電柱の木材にはスギの他にも外材のベイマツや北洋カラマツ等の利用事例があるが、これら外材の輸入量が急増するのは昭和30年後半から40年以降である（※）。御供田遺跡の電柱が所在するアメリカ軍板付基地（春日原住宅地区）の建設が開始されたのは戦後間もなくの昭和20年頃であり、外材の輸入量が急増する10数年以上前になる。本稿の同定結果は、電柱など板付基地内の建築材にはスギをはじめとする身近な国産材を調達・利用していた可能性を示唆したものと考えることはできないだろうか。※農林水産省木材需給報告書

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don

早材から晩材への移行は急で年輪界は明瞭である。軸方向要素は仮道管のみで、その放射壁上には有縁壁孔が並ぶ。放射組織はすべて放射柔細胞で、分野壁孔は典型的なスギ型、ほとんどが1分野に2個である。放射組織は単列で10細胞高程度のものが目立つ。以上の特徴からスギと同定した。

【参考文献】

- 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘 2006年『針葉樹材の識別』海青社
岩崎克己 1977年『防腐木柱の現状と問題点』『木材保存』公益財団法人日本木材保存協会
沢田正明 2003年『遺物の保存と調査』クバプロ
島地謙・伊東隆夫 1982年『図説木材組織』地球社

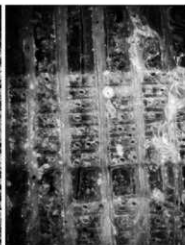


木製鳥居型電柱（右：電柱A-1 左：電柱A-2）

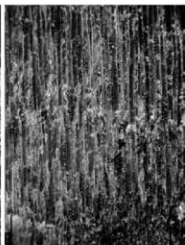
電柱A-1 樹種：スギ



木口面

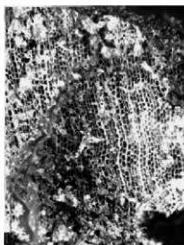


杙目面

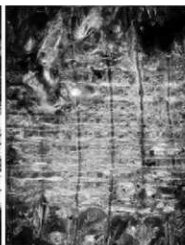


板目面

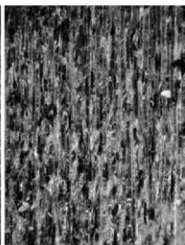
電柱A-2 樹種：スギ



木口面



杙目面



板目面

第18図 木製鳥居型電柱木材顕微鏡図

V. 総括

1. 各時期の様相

弥生時代 当該期の遺構は、SD01・02・03がある。SD03からは、全形をうかがえる小壺と甕が出土した。時期は前期後半（板付Ⅱb期）に位置付けられる。SD02は時期を推定する遺物に恵まれなかったが、SD03と同規模かつ北端部で一連の溝として取束する点を踏まえ、SD03と同時期の所産と考えたい。SD01からは小片の土器しか出土していないものの、概ね中期初頭頃と考えられる。

周辺では九州大学筑紫キャンパスの北側や春日高校グラウンドにおいて、中期から後期にかけての集落や墓域が展開する。しかし今回報告した時期の遺構はほとんどなく、遺物が少量出土しているのみであったため、遺跡動態を考える上で重要な成果となった。

飛鳥～奈良時代 当該期の遺構は、SD04・05・06がある。SD04からは牛頭編年IVB～VIIA期の須恵器が出土しており、7世紀中頃から8世紀前半までの時期幅が見込まれる。SD05・06もこの時期に近いものとみられる。土層を確認すると、SD06→SD04→SD05の順に掘削された可能性があり、埋没と掘削が繰り返されたものと考えられる。溝の機能についてはよく分からないが、丘陵裾部を取り巻くように存在していたとみられる。

当該期の集落は調査地から約100m北側で確認されており（県第1次調査）、特筆すべき点



第19図 御供田遺跡周辺遺構分布図 (1/5,000)

として獣脚面瓦が出土している（第19図）。また、西側の九州大学筑紫キャンパスには水城西門から鴻臚館へ至る官道が位置しており、その一部とみられる土橋状遺構（SX301）も確認されている。当該丘陵地には、6世紀後半から7世紀前半にかけての住居跡が多く、須恵器生産への関与が想定されている。一方7世紀中頃から後半の集落は、丘陵部の東側に場所を移している。同一集団の移転かは定かでないが、この時期は水城築造や官道整備期にあたることから、これらの事象との関連も視野に、検討を深める必要がある。

近代 当該期の遺構はSD08がある。様々な時期の遺物を包含するが、出土したガラス瓶の年代から昭和初期までは機能し、板付基地整備前には埋没していたようである。この溝は、大野城市と春日市を画する現況の境界線と同位置にあることから、境界設定に際して何らかの指標となった可能性がある。また、統制瓦の小片が一点採集されており、現在の春日公園に存在した小倉陸軍造兵廠春日製造所といった軍の施設に使用された可能性が想定される。

（山元 瞭平）

2. 板付基地春日原住宅地区関連遺構について

板付基地春日原住宅地区の概要 板付基地春日原住宅地区とは、戦後米軍が旧日本陸軍の席田飛行場とその周辺施設を接収して設置した板付基地の付属施設のひとつである。春日村（現在の春日市）の軍需工場である小倉陸軍造兵廠春日製造所と大野村（現在の大野城市）の田畑や墓地などを米軍が宿舍用地として買収し、整備した。住宅地区の面積は約156万4,700㎡あり、春日村が75%、大野村が25%を占めていた。

また春日原住宅地区は、板付飛行場（現在の福岡空港）から約7km南に位置し、地元では「白木原ベース」や「春日原ベース」と呼ばれ、当時の住宅地区内には住宅以外にもBXやカミサリといった食料品や日用品の販売施設や教会や学校、映画館やボウリング場などの娯楽施設があった。

しかしベトナム戦争が進むにつれ、米軍は沖縄への基地集約を進め、昭和47（1972）年4月に板付基地は日本に返還され板付飛行場は福岡空港となった。春日原住宅地区は同年6月に返還され、現在その土地には航空自衛隊春日基地や九州大学筑紫キャンパス、大野城市立大利中学校、大野城市立大利小学校などが建っている。

基地内施設と遺構について 板付基地春日原住宅地区内の施設配置図と本調査地の遺構配置図を重ねたものが、第21図である。これに従い、検出した各遺構について検討を加える。

造成土：本調査地は、春日原住宅地区の東に位置する。昭和36（1961）年の空中写真を見ると、北西から南東にかけてアスファルト舗装の道路が走り、道路の北東にはガソリンスタンドが建ち、調査地のさらに西側には家族用住宅が建っている。従って調査区西側で確認した造成土は、家族用住宅など施設の建設に伴うものと考えられる。昭和23（1948）年の空中写真では、調査地西側周辺は、造成された箇所と自然丘陵が残る箇所があるが、昭和31（1956）年の空中写真では自然丘陵部分の造成が行われており、昭和36年には、家族用住宅が立ち並んでいる。これは、基地内の住宅不足に対応した結果と考えられる。

貯油タンク：貯油タンクが検出された場所には、当時ガソリンスタンドが建っていることが判明した（第20図）。この施設は昭和23（1948）年の空中写真には写っていないため、貯油タンクは、昭和23年から昭和36年の間に埋められ、板付基地返還の昭和47（1972）年まで利用されていた可能性がある。

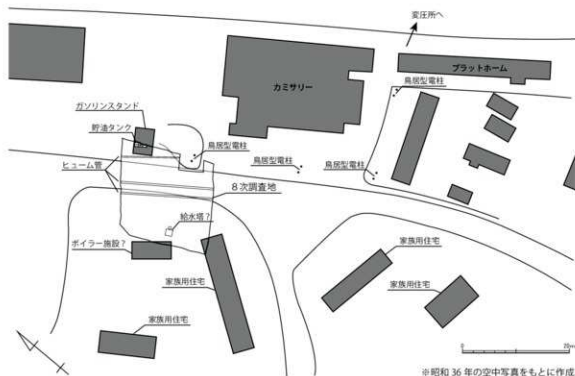


第20図 ガソリンスタンド写真
（春日市教育委員会蔵）

配管：調査区内で見つかった配管は、セントラルヒーティング配管と下水用のヒューム管である。西側造成

土（家族用住宅地）で見つかったセントラルヒーティング配管は、ボイラーで発生させた蒸気熱を春日原住宅地区の住宅や施設内部に届けるための配管で、蒸気管と蒸気の熱を放出して温度が下がった凝縮水（ドレン）管の二本が通っている。また下水用のヒューム管は、径の大きいものと小さいものが通っており、大きいもの（配管B）は雨水管で、小さいもの（配管C）は污水管とみられる。白木原地区の聞き取り調査の結果、雨水はヒューム管により直接牛頸川に流され、汚水は一度春日原住宅地区にある浄水施設に集められ、浄化後に牛頸川に流されることが判明した。

コンクリート構造物：家族用住宅は木造であったことから、特殊な構造物とみられる。これは水槽の可能性があり、候補として給水塔が挙がる。鋼管が接続していることから、ポンプを用いてタンクに揚水し、タンクから各施設へ配水したのではないかと考えられる。昭和23（1948）年の空中写真には写っていないが、昭和31（1956）年の空中写真に写っていることから、昭



第21図 板付基地春日原住宅地区施設配置図 (1/1,400)

和23年から昭和31年の間、自然丘陵部分の整地と同時期に建設されたと推測できる。

鳥居型電柱：昭和47（1972）年の住宅地図を見ると、中央1丁目343-4周辺に変圧所があることが判明した。また昭和36（1961）年の空中写真を見ると、この変圧所から調査した電柱の間には3本の鳥居型電柱が設置されており、電線が変圧所から春日原住宅地区内へと伸びていたことが分かる。今回調査した電柱には高電圧専用の碍子もついていたことから、鳥居型電柱は変圧所で変換された電流を春日原住宅地区内へ配給していたと考えられる。

まとめ 調査区周辺は地上にガソリンスタンドや電柱が建ち、地下に配管やコンクリート建造物が存在したことが明らかになった。このことから調査区周辺は板付基地春日原住宅地区のインフラをつかさどる場所であった可能性が高いと考えられる。給水塔と思われるコンクリート構造物は、基地内施設図には示されていないため、当時の状況を知る方への聞き取りや写真資料の調査を引き続き行う必要がある。（深町 美佳）

第1表 遺物観察表①

遺物番号	種類	群類	出土地点	位置(座標) ①(1)柱状土器(2)土器(3)土器 ④最大径(5)高さ(6)厚さ	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:胎色 C:色調	備考
1	弥生土器	甕	SD01 埋土	②(2.2)	内外面コナナ	A:3cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内面YR7.5に いぶき褐色 外YR7.5/2にいぶき褐色	
2	弥生土器	甕	SD01 埋土	②(2.7)	内外面コナナ	A:3cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内面YR7.5に いぶき褐色 外YR7.5/3にいぶき褐色	
3	弥生土器	甕	SD01 埋土	②(2.8)	内外面コナナ	A:3cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内面YR7.5に灰白色	
4	土器品	鉄砲	SD02 土層	②(54.7 ②4.2 ②5.4)	ナツ形煎	A:3cm以下の白色砂粒、石片、石屑、炭屑を含む B:良好 C:YR7.5褐色	
5	弥生土器	小壺	SD02 土層	①(9.25) ②(15.2) ③(25.2) ④(14.7)	丸蓋E形 内面ナデ 頸部有紐糸の痕跡下に無紐引文を施す	A:3cm以下の白色砂粒、石片、石屑、炭屑を含む B:良好 C:内面YR5.5に灰白色～YR7.5/4褐色 外 YR7.5/2に灰白色～YR7.5/6褐色	
6	弥生土器	甕	SD02	①(49.0) ②(40.3) ③(11.6)	腹部外面にナツ 頸部外面にナメ 内面一 部面ナツ 胎はナデ (1)頸部外面に1本、 頸部外面に3本の無紐引文あり	A:5cm以下の白色砂粒、石片、石屑を含む B:良好 C:内面YR7.5にいぶき褐色～YR7.5/1褐色 外 YR7.5/1に灰白色～YR7.5/6 褐色、YR7.5/1 褐色	内外面磨光
7	弥生器	片蓋	SD04 検出	①(12.4) ②(3.5)	天幕型片蓋面回へタケナリ 他は回転ナデ	A:磨光した白色砂粒、炭屑を含む B:不良 C:内面YR4.4に赤褐色 外YR3.5/9に赤褐色～ YR7.5/4にいぶき褐色	
8	弥生器	片蓋	SD04埋土1階 下1F	①(3.7) ②(1.5)	天幕型片蓋面回へタケナリ 他は回転ナデ	A:磨光した白色砂粒を含む B:中～良好 C:YR2.5/7.1に灰白色 外YR7.5/1褐色	
9	弥生器	片蓋	SD04 検出	②(3.7) ③(0.8)	腹部外面へツクリ 他は回転ナデ	A:磨光した白色砂粒、炭屑を含む B:不良 C:内面YR7.5にいぶき褐色 外YR7.5/2に灰白色～ YR7.5/1 褐色	
10	弥生器	高杯	SD04 検出	②(3.65) ③(1.7)	頸部外面内面ナデ 他は回転ナデ	A:3cm以下の白色砂粒、石片を含む B:良好 C:内面NS/1褐色～NS/2 褐色	頸部外面自然磨
11	弥生器	甕	SD04 検出	②(4.2) ③(4.5)	腹部外面回転へタケナリ 他は回転ナデ 外周中位の穴縁に1対最大径を施す	A:3cm以下の白色砂粒、7mm以下の石片、石屑を含む B:良好 C:内NS/1褐色 外YR7.5/1に灰白色～NS/2 褐色	内外面磨光 内面一部自然磨
12	弥生器	甕	SD04 検出	①(27.0) ②(11.8) ③(25.0)	腹部内面同心円文で片蓋 他は回転ナデ 外周中位の穴縁に1対最大径を施す	A:3cm以下の白色砂粒、7mm以下の石片を含む B:良好 C:内NS/1褐色 外YR7.5/1に灰白色～NS/2 褐色	内外面磨光 内面一部自然磨
13	土器群	甕	SD04 検出	①(16.4) ②(1) ③(1.1)	腹部外面へツクリ面ナデ 他は回転ナデ	A:磨光した白色砂粒、炭屑を含む B:良好 C:内YR7.4にいぶき褐色 外YR7.5/6 褐色	
14	弥生器	片蓋	SD04 土層	①(10.5) ②(4.0) 受部径(12.6)	腹部外面へツクリ面調整 他は回転ナデ	A:磨光した白色砂粒を少し含む B:良好 C:内NS/1褐色 外NS/6 褐色	
15	弥生器	片蓋	SD04 土層	①(10.0) ②(2.8) ③(6.6)	腹部外面へツクリ面ナデ 腹部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ 表面外面へツクリあり	A:3cm以下の白色～褐色砂粒を少し含む B:良好 C:内面NS/1褐色、NT/1 灰白色	底みぞあり
16	弥生器	片蓋	SD04 土層	①(13.8) ②(1.8) 受部径16.0	天幕型片蓋面回へタケナリ 天幕型内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:3cm以下の白色砂粒、炭屑を含む B:良好 C:内NS/1褐色～NS/2 褐色 外YR7.5/1に灰白色～ NS/4 褐色	
17	弥生器	片蓋	SD04 土層	①(20.1) ②(1.5) ③(14.1)	天幕型片蓋面回へタケナリ 腹部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:3cm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内YR5.5/1 赤褐色 外YR5.5/1赤褐色～YR7.5/1 褐色	
18	弥生器	高台 片蓋	SD04 土層	②(2.6) ③(6.3)	腹部内面ナデ 他は回転ナデ 表面内面へツクリあり	A:3cm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内面NS/1褐色	
19	弥生器	甕	SD04 土層	②(6.4)	内外面回転ナデ	A:3cm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内面NS/1褐色	
20	弥生器	高杯	SD04 土層	①(16.0) ②(4.1)	腹部外面回転へタケナリ 腹部内面ナデ 他は回転ナデ	A:3cm以下の白色砂粒、石片を含む B:良好 C:内YR5.5/1褐色 外YR5.5/1褐色～YR7.5/4に いぶき褐色	
21	弥生器	甕	SD04 土層	①(7.0) ②(4.0)	腹部内面ナデ 他は回転ナデ	A:4cm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内面NS/1褐色	

第2表 遺物観察表②

遺物番号	種類	形状	出土地点	数量(≒)	注1)採取部(≒)注2)採取層(≒)注3)採取層(≒)注4)採取層(≒)	形態・技法・文様の特徴	A:粘土	新焼成	C:色調	備考
22	瓦器類	甕	SD04 上層	②(100)		外面平行切。内面同心円文で瓦根	A:16m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
23	土器類	井	SD04 上層	①(187) ②(3.5)		内外面回転ナデ	A:73m以下白台砂粒を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
24	土器類	皿	SD04 上層	①(174) ②(8.0) ③(2.6)		底部外面回転→ヘラナデ。底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色			
25	土器類	甕	SD04 下層 上層(崩壊)	②(275) ③(13.0)		底部外面回転→ヘラナデ。他はナデ	A:16m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
26	土器類	甕	SD04 上層	①(134) ②(5.0)		底部外面→ヘラ。他はナデ	A:45m以下白台砂粒を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
27	土器類	甕	SD04 上層	①(150) ②(10.0)		内外面→ヘラ	A:45m以下白台砂粒を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
28	瓦器類	存身	SD04 下層	①(110) ②(4.1)		外面内面ナデ。他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
29	瓦器類	存身	SD04 下層 (上層A式→C)	①(102) ②(3.9) 次層(12.0)		底部外面→少切り。底部内面ナデ 他は回転ナデ。底部外面→少切りあり	A:45m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
30	瓦器類	存身	SD04 下層	①(109) ②(3.3) 次層(13.4)		底部外面回転→ヘラナデ。他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色			
31	瓦器類	存身	SD04 下層	①(8.5) ②(3.5)		底部外面→少切り。底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色			
32	瓦器類	存身	SD04 下層	①(110) ②(4.1) ③(8.1)		底部外面→少切りナデ 底部外面不定方向ナデ。他は回転ナデ 底部外面→少切りあり	A:黄褐色白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			蓋あり
33	瓦器類	存身	SD04 下層	①(154) ②(2.0)		外面外面回転→ヘラナデ 外面内面ナデ。他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
34	瓦器類	存身	SD04 下層 (上層A式→C)	①(135) ②(6.2) ③(10.0)		底部外面回転→ヘラナデ 底部内面不定方向ナデ。他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			蓋あり
35	瓦器類	井	SD04 下層	①(146) ②(4.9) ③(9.0)		底部外面→少切りナデ 底部内面不定方向ナデ。他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
36	瓦器類	高杯	SD04 下層	②(3.0) 崩壊(10.0)		外面内面ナデ。他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
37	瓦器類	井	SD04 下層	①(160) ②(3.0)		底部外面→少切り。底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
38	瓦器類	井	SD04 下層	①(134) ②(7.0)		底部外面→少切り。他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
39	瓦器類	横瓶	SD04 下層	①(112) ②(7.75) 崩壊(9.3)		底部外面回転。底部内面同心円文で瓦根 他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			1) 底部内面砂粒 瓦。2) 底部内面 瓦根
40	瓦器類	甕	SD04 下層	②(4.0)		外面平行切。内面同心円文で瓦根 外面2本の取手あり	A:16m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
41	瓦器類	甕	SD04 下層	①(226) ②(7.5) 崩壊(17.2)		外面平行切。底部内面同心円文で瓦根 他は回転ナデ	A:黄褐色白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
42	瓦器類	甕	SD04 下層	②(4.2)		外面平行切。内面同心円文で瓦根	A:黄褐色白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
43	瓦器類	甕	SD04 下層	①(237) ②(21.05) ③(40.4) 崩壊(20.9)		底部外面平行切。内面同心円文で瓦根。他は回転ナデ	A:黄褐色白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
44	土器類	甕	SD04 下層	①(112) ②(3.7)		外面平行切→ヘラナデ。他はナデ	A:黄褐色白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
45	土器類	井	SD04 下層	①(120) ②(4.3)		内外面回転ナデ。外部下取手4ヶ所	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			
46	土器類	甕	SD04 下層	①(144) ②(7.0)		底部外面→ヘラ。底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:黄褐色白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			1) 底部内面砂粒 瓦
47	土器類	甕	SD04 下層	①(207) ②(7.0)		底部外面→ヘラ。底部内面ナデ 1) 底部外面回転ナデ	A:黄褐色白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			外面取手
48	土器類	甕	SD04 下層	②(7.7)		ナデ成形。底部ナデ	A:55m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			浅黄褐色
49	土器類	甕	SD04 下層	①(127) ②(18.0) ③(18.4)		内外面ナデ一部→ヘラ	A:45m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			底部内面、底部外面 下取手付
50	瓦器類	存身	SD08	①(122) ②(8.6) ③(8.2)		底部外面回転→ヘラナデ。他は回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色			
51	土器類	小甕	SD08	①(9.0) ②(8.2) ③(10.7) 崩壊(18.4)		底部外面→ヘラ→ヘラ。底部内面ナデ 1) 底部外面回転ナデ	A:73m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径1.0YR6/4 浅黄褐色、赤2YR5/3にL10~赤褐色			内面→1) 底部外面 崩壊付
52	瓦	平瓦	SD08	残存数0.5 残存層11.1 厚4.0		外面平行切。凹面ナデ	A:45m以下白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色			
53	瓦製品	瓦当	SD08	残存数0.5 最大幅4.2 厚3.44						瓦当類
54	ガラス製品	瓶	SD08 上層	②(8.0) ③(3.3)		底部外面、底部外面下取手あり				
55	瓦	瓦葺	表層	残存数9.8 残存層3.5 厚1.75		外面平行切あり	A:黄褐色白台砂粒、黒石を含む。黒不具 C:内径2.5YR6/3にL10~褐色			

圖 版



(1) 調査前全景 (北東から)



(2) 調査地全景 (南西から)

図版2



(1) 調査区俯瞰① (上が東)



(2) 調査区俯瞰② (上が東)

(1) 調査区北壁土層
(南東から)



(2) SD01全景 (南から)



(3) SD01土層A-A'
(北から)



図版4



(1) SD01土層B-B'
(北西から)



(2) SD02全景(南東から)



(3) SD02土層A-A'
(南東から)

(1) SD02土層B-B'
(南東から)



(2) SD02遺物出土状況
(北から)



(3) SD03全景 (南東から)



図版6



(1) SD03土層A-A'
(南東から)



(2) SD03土層B-B'
(南東から)



(3) SD04全景 (南から)

(1) SD04土層A-A'
(南から)



(2) SD04土層B-B'
(南から)



(3) SD04土層C-C'
(南から)



図版8



(1) SD04遺物出土状況
(北東から)



(2) SD05土層 (南から)



(3) SD06土層A-A' (南から)

(1) SD08土層A-A'
(北東から)



(2) 貯油タンク
(南西から)



(3) コンクリート構造物
(南東から)





(1) 木製鳥居型電柱 (南西から)



(2) 木製鳥居型電柱A (北から)



(3) 木製鳥居型電柱A (南から)



6



34



15



39



28



43



31



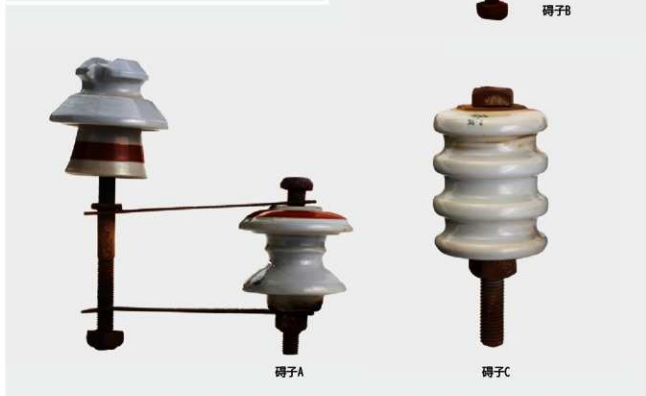
44



32



45



報告書抄録

ふりがな	ごくでんいせき							
書名	御供田遺跡6							
副書名	第8次調査							
巻次	6							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第203集							
編著者名	山元 瞭平(編) 深町 美佳							
編集機関	大野城市							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2023年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
御供田遺跡	福岡県大野城市 大字白木原 317番13、407番9、 635番9	402192		33° 31′ 29″	130° 28′ 45″	2021年 4月7日 ～ 2021年 7月27日	1,500㎡	施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
御供田遺跡 第8次調査	集落等	弥生・飛 鳥・奈良	溝・ピット	弥生土器・ 須恵器・土師器				
要約	第8次調査では溝やピットを確認した。溝は弥生時代および飛鳥～奈良時代に位置付けられる。いずれの溝も機能は明らかでない。また、戦後に米軍が整備した板付基地春日原住宅地区に関連する遺構を確認し、施設の整備過程や地下の状況が明らかになった。							

大野城市文化財調査報告書 第203集

御供田遺跡6

令和5年3月31日

発行 大野城市
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社
〒848-0035 佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5